抄錄

才廿九号

洋学文庫
文庫8
E 20

昭和參年十月畏友森銑三君、拙ぶ爲めに
諸書を渉りて曩祖岡研介に關する文書を
手寫して贈らる、今其厚意を紀念し併せて
祖先の遺文を後年に殘さんため茲に纒め
おくものなり、近年毛筆に親まず且視力を損
ずる事甚しければ謄寫なきを保し難し、病
餘の少閑を偷ぬで書す

昭和四年三月五日　不肖　憙合

木林君は筑州外谷の人。篤學にして高潔、溫雅にして誠實、嘗て稀に見るの士なり、職を史料編纂掛に奉ずること今三十有餘、蘊蓄測るべからざるものあり、後年の大成期して待つべし。

岡研介苦學得病次韻其詩以寄

人而男而壽。三樂須歸榮。我細推物理。
妖言近人情。美矣生前酒。漠然身後名。
公且莫嘲我。衆庶謾貪生。寄詩發一笑。
病間試論評。（小竹齋詩鈔　卷之一）

岡研　字子寛、稱研介、周防岩國人。子寛專力蘭學、志在大成、過四十歿、淡翁作之碑

赤間關寓居、次韻　平文明

多年瓊浦在。幾月馬關留。赤鼓冲天翮。
如乘衡瀨舟。書燈寒達曉。旅館澹於秋。

賴有輔仁友。天涯互唱酬。

群鬼攻醫家圖

研介

古柏林深北邙巔。天隙雨濕夜淒然。浮雲慘々風瑟瑟。群鬼啾々聚隧埃。飄散雪飛何處往。落下一醫藥室前。空中有聲相逐至。歐欷慷慨何限意。練衣被鬢或戴刀。男女長幼形各異。蹙頞揮淚啼吞聲。辟手目磨牙怒攘臂。誰家妖婦抱腹噫。何處聾者倚杖悲。可憐既芋權兩菊。可憐未秀蕤霜芝。長夜臺上何日旦。千秋万古無起時。問汝胡爲再一鬼說終始。當年夭折人。多因彼手死。去月喪母兄。今月亡妻子。昨夜吾亦終不負。携来皆是報讎士。殺人何啻蕃戮者。無分無戟唯一匕。漫言疾病有定方。不論天禀果何似。劇劑投未應手僵。百敗不謂吾誤矣。膽氣從來甚豪粗。反唇却罵世醫迂。譬之豺狼與盜賊。殘忍傲然自嬉娛。盜賊非人固其所。豺狼是獸與人殊。醫者不然仁爲術。況復學子醫兼

學儒。詩書禮樂常口。正邪善惡豈可誣。君不見罪之非肯雖微小。禮經難逃聖人誅。將碎其骨爲齏粉。將腹其膏潤口吻。我輩有恨深且深。咄嗟何以散此憤。老鬼在其傍。低聲喻群殤。陽間不用相報復。冥中自有囚獄場。夜叉獰惡堪恐怖。牛頭電目體青蒼。訊鞫鞭笞就俎上。剝皮剖胸汝沸湯。此時真痛毒。叫呼徹四方。今我含寃氣。每夜徒彷徨。不如從茲去。一一訴閻王。言已須臾不見影。霜白鐘鳴轉幽靜。回頭落月在西山。酸風一陣衣裳冷。

子寃志不在詞華、錄此以表志尚。

以上《宜園百家詩三編 卷之四》

與子寃書

鄉承手札、君鳳之歸、託以復書、想應既達、書中所言自新錄、今呈左右、力學之暇、一忝披閱幸甚、此編本不欲示人、但忠信如子寃者、則不敢秘、若有論議不得其宜、又旧來過失、猶未自知者、願痛加指斥、編中頗及瑣屑、子

宛高邁、意或鄙之、然在僕身分、此等之事、亦不得不留意、若言不顧行、徒誇文辞、非此編所主也、請諒察焉、僕十三四歲之後、稍就蹉跎、至今三十年矣、計其成功、不過費十年力、則許多歲月、總付悠々、每一思之、千悔万恨、淚下不能自禁、然徒悔無益、故欲收之於桑榆、或有天寵、假以耆老之壽、與其聰明氣力、猶可小補前過耳、嗚乎子宛、執志堅剛、自幼及長、未嘗小怠、雖至白首、應無悔事、志學之士、如子宛上也、少壯懶惰、中年改轍如僕猶可爲次乎、終身不復、斯爲下矣、吾黨二三子迷塗者不少、想應有中年改轍、亦應有終身不復、要之、如子宛者、不易得也、子宛其自重哉、僕素柔懦、今雖勉勵、安知斯志之不再撓乎、故以此編、寄示子宛、猶示子宛、猶盟詛於鬼神之意也、異日不踐其言、則子宛宜以此詰責焉、古人取友、或以同德、或以同意、豈在年齒先後乎、若以長幼自拘、不敢盡言、非僕之所望於子宛也。

送岡子寃序

岡子寃豈不誠豪傑之士哉、其於學也篤、信所聞而固執之、行事質直而方、言論明白、如日月皎然、文辭雄健富贍、如江河沛然莫之能禦、求諸當世人、未見其比也、子寃山陽人、西遊我黨有年、及其東歸、請言於予、予曰、昔蘧伯玉行年五十、知四十九年之非、夫以伯玉之賢、雖少壯時、豈違道悖義乎、蓋好學之篤、虛己受人、衆思會焉、群言集焉、日就月將至老未止、然後顧往日所爲、則始有不慊於其懷者、唯其進德、是以能知其非也、衆人則不然、先入之言爲主、有後至者、扞格不受、學術行事、一成無變、又何知非之有、今子寃東歸、有講業於大都會之志、據天下之圖書、交海内之英俊、其益廣哉、且其齒未也、中年所詣未可量也、然則嚮所信者、或變爲疑耶、固者或化爲博耶、質者文而方者圓耶、微以寓明、玄以藏白耶、渊注海蓄、以收沛然者耶、抑炔可爲子寃言、難爲衆人言也、子寃往哉、想十年之後、我再

見子寇、非洛之表、則墨之汭矣、握手論心、以及往日耶、及其行事、輙蹙然曰、少年客氣、久而自悔耳、及其所著述、輙幡然曰、未成之業、既附諸炎火、於是乎果知子寇丸之爲豪傑矣

（淡窓小品　巻之上）

淡窓全集より抄寫

「文政二年己卯、余年三十八、濠田ノ宅ニアリテ業ヲ講ズ、此年入門スル者……岡研介（防州人）……（懷旧楼筆記巻十九）

二十三人目ニ出ヅ

二於一歳ニ当ル

「……研介ハ少クシテ蘭學ヲ好ミ、其名世上ニ高シ、其事ナホ下ニ出セリ……」

（同　前条の次）

「九月十四日」初メ益多（中島米華　字子玉）西遊セシ時　字次郎、代ッテ都講トナリ塾政ヲ佐ジタリ、幾クモナクシテ古賀万庵来ッテ塾ニ入レリ。……其位次本字次郎ガ上ニアリ、故ニ二子権ヲ爭ッテ塾中穏カナラズ。此ニ於

屯、一溪、研介三子ニ命ジテ之ヲ調和セシメ、宇次郎
万庵二子ヲシテ輪番交代ヲ以テ塾生ニ仕セシム……」（仝上）
「「十月二十四日」佐藤玄猷カ家ニ詩會有ツテ赴ケリ潤二
研介從行セリ……」（懐旧様筆記　巻二十）
「明年、諸生塾ニアリテ年ヲ守ルモノ凡拾八人……研
介（四人目ニ出ツ）……」（同上）
「文政三年庚辰、余歳三十九、咸宜園ニアリテ業ヲ
講ズ。明年入門スルモノ……小川敬馬（四十二人目ニアリ）
「……敬馬ハ研介カ弟ナリ……」（仝上前条の次）

「晦日、諸生歳ヲ塾ニ守ルモノ十八人。……敬馬（十四人
目ニアリ）……」（研介ノ名ナシ）（仝上）
「「文政四年正月」二十六日　僧一圭別レヲ告ケテ去レリ、初
メマ予屯、一圭、研介ヲ以テ三長者ト名付ケ、都講ノ
副トナシテ塾政ヲ調和セシム、一圭尤モ事ニ幹タルノ才アリ
……（巻二十一）（一圭のこと朝川善庵の樂我室遺稿ニ傳あ
り、月琴を習ひし最初の邦人といはる、この人の詩文稿あらば研
介先生に関する事実も何か知り得べきか。屯は隨山屯と後ヨあり
文政四年二月塾を去る「去るに及んで三長者を失ひりと談笑

記ろせり。

「六月二十五日」益多（中島）塾ヲ去ッテ肥筑ノ間ニ遊ブ。去春筑前ヨリ帰リ、熟塾政ヲナス事殆ト一年半ナリ、益多去ッテ後ハ、仰次郎 研介カ輩、更ル〳〵塾政ヲナセリ」（仝上 中島益多の手稿帝國図書館にあり、研介先生の事は何ル見えさりしかと記臆す）

「晦日、諸塾生ニ於テ歳ヲ守ルモノ二十一人、……」（この中に研介、敬馬、の名なし）

「文政五年」六月五日夜、悪寒シテ胸腹苦満ス翌六日ニ至リ瀉下スルコト十餘行、七日ニ至リ痔疾大ニ發シ脱肛収マラズ。八日ニ至リ小便閉塞シ苦ミ言フヘカラズ。研介ニ命ジ、手術ヲ以テ脱肛ヲ収ム。ソノ苦ミ堪ヘカタク、中ニシテ止メントス、因ッテ思フニ、昨夜枕頭ニ於テ筮ヲナセリ。豫ノ六二、介于石不終日ノ爻ヲ得タリ、ソノコトヲ思ヒ、意ヲ決シテ治ヲ受ケタリ。脱肛既ニ收マリ、小便モ亦通利セリ。数日ニシテ本ニ復

セリ。（巻二十二）

「九月二十日」門生釈普敬、金苗見龍、箕浦首
今、三人罪アルニ因ツテ擯出セリ。（次ニ罪状ノコトアリ）余
ソノコトヲ知ルト雖モ、徒黨甚タキニヨリ隠忍シテ漏ラサ
ス。竊ニ叔父及三松静壽、森成作、澄川造酒右衛
門、和田一平、岡研介、児玉茂等ト相議シ、遂ニ至ル
テ遂ニ之ヲ放ツテ塾ヲ出テシム……。」（仝上）

「文政六年癸未」余歳四十二。咸宜園ニ在ツテ業ヲ
講ズ。此歳入門スモノ。……岡司馬周防岩国人（三十九人目）
……（仝上）

「……岡司馬ハ研介カ兄ノ子ナリ。既ニ没セリ……」（仝上）

「九月十九日」謙吉（旭荘）福陵ニ赴カムトス。昭陽先
生ニ謁シ、且ツ與ヘンガ爲メナリ。是ヨリ先、研介福陵ニア
リシカ、暫ク来ツテ余カ塾ニ留マレリ。其再遊スルニ及ンデ
謙吉ヲシテ同行セシム、謙吉時ニ年十七ナリ。……十二月
ニ至ツテ家ニ帰レリ」（巻廿三）

「晦日」門人塾ニアツテ歳ヲ守ルモノ二十六人。……司馬（二十

四人目みあり）（仝上）

「文政七年晦日」塾ニアリテ歳ヲ守ルモノ、ニ（司馬の名見えず）

「文政十二年二月晋」余ハ門人岡研介長崎ニアルヲト教年、吉雄忠次郎カ兄権之助カ弟子トナリ、又親シク失勃児ニモ従ッテ蘭學ヲ研究シタリ。コノコロハ長崎ヨリ去ッテ赤間関ニ客タリシカ、長崎大尹ヨリ急ニ召サルヽコトアリテ、彼地ニ赴ケリ、世上ニテハ皆蘭医ノ事ニ坐セラレタル由専ラ沙汰セリ、是傳聞ノ誤リナリ。研介カ召サレタル

三十一歳ニ当ル

ハ禁書ノコトニヨレリ。然須長崎ニ他ノ邦ヨリ来學ノ書生アリ。三山論學記ト云フ書ヲ讀居タリ、是ハ明末西洋ヨリ来リシ艾儒略カ所著ニシテ、天教ノ事ヲ申セシモノナリ、聖堂ノ教授向井某其事ヲ宦府ニ訴ヘタリ。因ッテ書生ヲ執ヘ詰問アリシニ、研介ヨリ借用セシ由ヲ申ス、研介モ亦人ニ借リタルナリ、研介已ニ崎ニ到リシニ彼地親戚ノモノ教ヘテ曰ハク、必ス書ノ主ヲ明スコトナカレ、左スレバ連累ノモノ多クナリ其禍ハカルベカラズ、唯古物市ニテ買ヒタリ、未タ見ルニ暇アラスト答フベシト、研介大尹ノ前ニ出テ、

右ノ如ク答ヘテ事スミ、書ハ焚棄ニナリタリ。実ハ忠次郎吉雄氏ヨリ私ヤニ借用セシ由ナリ。吉雄ハ秘書監ヲ兼ネタリ、故ニ秘府ノ書ヲ取出セシトリ」（巻二十七）

「文政十三年二月十六日」（此年改元天保元年）岡研介長崎ヨリ帰途来訪、十八日ニイタリ辞シ去レリ、研介往年マヤカ塾ヲ去リシヨリ長崎ニ留マリ蘭学ヲ研究スルコト多年。已ニシテ京間関ニ在ツテ開業ス、禁書ノコトニ坐スルニヨリ又長崎ニ赴キ此度帰来ル。是ヨリ浪華ニ赴ク也。予研介ヲ見ルコト此度ニ留マレリ。此時研介一書生ト為ル

ニモ其名已ニ海内ニ傳ハレリ、之ヲシテ壽者ナラシメバ其事業測ルヘカラス。」（巻二十九）

「天保十一年四月二十八日」此日、岡研介カ死スルコトヲ聞ケリ、歳四十一ナリ、久シク狂疾ヲ發セシカ、終ニ愈ユルコトヲ得サリシナリ、此人蘭學ヲ研窮シテ、少年ノ時ヨリ已ニ一世ニ知ラレタリ、性モ亦極メテ質直方正ノ人ナリ、斯人ニシテ斯ノ疾アルコト、命ナルカナ」。（巻四十一）

（右懐旧楼筆記は弘化三年渓窓六十五の歳起草、五年を經て成就、過去の日記の要を摘み、已の一生の行事より、関係ありし人々の上のことをもしるせしもの）

渓窓日記より抄写、

「文政二年四月」十二日、周防岩國醫生岡研介入門、以坪井一助書爲介。……（渓窓日記巻十二）

（註）全集入門苗字は「文政二歳四月十三日 防州玖珂郡立ケ濱新市岡研介（三松齊寿 招介）」とあり

立ケ濱は旧幕時代玖珂郡にあり、平生村は立ケ濱の一部なりしなり、立ケ濱、竪ケ濱と書す、明治以後、岩國領也、明治以後、平生村、平生町となり、竪ケ濱は小字と化す一寒村なり、

「十三日」研介入塾、於是書生在塾者、凡三十人 …… 益多 …… 研介（三十人目あり）（全上）

「三十六日」……改月旦評 …… 一溪 問人 …… 研介 …… 一善之助入席。（全上）

「五月」二十五日 …… 改月旦評 …… 研介 …… 加一級下 …… （全上）

「六月」二十六日、病如昨、服藥四貼（研介所剤）改月旦評 …… 研介、小三郎 加一級上。……」（全上）

「晦日」……夜四更後聞嚴君有疾、使研介、俊良往視之、亦食鬱也、……（全上）

「七月」二十五日 …… 改月旦評、研介 …… 加二級下 ……（全上）

「二十七日」……夜四更後妻有疾、呼研介調藥 …… （全上）

「八月四日」……使研介弔廣國寺。……（三日の夜同寺火災の記

事あり」（仝上）

「十五日」……桂井一助、自赤馬関至来見、留之小酌、呼研介陪焉。……（仝上）

「二十五日」……改月旦評、春育、研介加二級上。……（仝上）

「二十九日」……於是書生在塾者三十五人（研介（十人目ヨリ出ヅ））

「九月」朔……屯移居秋風庵請大帰、使一渓研介止之。……（仝上）

「十月」十二日……詣府……是日、実有會艸堂之約、予以不在、使研介接客、……（仝上）

「二十四日」……午時會佐藤玄猷家、尋十二日艸堂之會也、潤二研介従焉、……（仝上）

「二十五日」……改月旦評……研介加三級下、……（仝上）

「十二月」二十九日……是歳門生守歳於塾者、十有八人……研介（四人目ヨリ出ヅ）……（巻十三下）

「文政三年正月」五日……是日、會内外弟子觴之、凡三十有三人（議吉……研介（六人目ヨリあり））……（巻十四）

「二十五日」……改月旦評、研介加三級上、……」（仝上）

「二月」二日……使研介往渡里……」（洛含志考）（仝上）

「十二日」……於昌書生在塾者、凡三十人、益多……研介（九人目あり）。（仝上）

「二十六日」使研介攝講歸……（仝上）

「四月」冒　府君有命、使悉率内外生徒到府、凡七十一人、益多……研介（九人目あり）……（仝上）

「五月」二十日　蒲地久市偶至、因招佐藤玄猷、及益多謙吉、一溪、亨、研介、一九郎、同會賦詩、未暮而散……（仝上）（一溪は懷旧樓日記の一主なり）

「二十四日」赴佐藤玄猷招、……會者、益多、謙吉、一溪、研介（以下四人略）日入而歸」（仝上）

「二十五日」、改月旦評　益多加七級下　自有月旦評此等者以益多爲媚、謙吉加五級下、亨、研介加四級下。……」（仝上）

「六月十三日」會草堂、會者　益多、謙吉、元爲、賴之、一溪、亨、研介、……」（仝上）

「十四日」、昌日休業、藤府君賜飯於塾生於合原善三郎家、凡三十四人、益多……研介（六人目あり）……」（仝上）

「七月四日」會艸堂、會者、益多、謙吉、元爲、一溪、亨、研介、……」（卷十五）

「九日」府君有命、會諸子婦、以嚴君疾、往祈石松村觀音、予詣府奉命、與妻及久兵衛妻、仲平謙吉等皆往、合門生益多、研介、一九郎、嬶僕、殆二十人、……」（仝上）

「三十四日」……未時佐藤玄猷來、因集卅堂、會者、謙吉、元爲、亨、研介、……」（仝上）

「八月四日」……午後與諸子、會佐藤玄猷宅、會者、益多、謙吉、元爲、昂、亨、研介……」（仝上）

「十日」……周防人小川數馬入門、居塾、研介弟也……」（仝上）

「十九日」……夜三更頃、妻得疾吐瀉交興、招研介診視……」（仝上）

「二十四日」諸子會卅堂、……研介（七人目まあり）（仝上）

「九月十七日」使研介往吊廣圓寺法珍、喪子故也。……（仝上）

「二十八日」……晩與益多、研介、小酌於樓上、二更而散。……」（仝上）

「十月二十六日」改月旦評、研介加四級上。……」（仝上）

「十一月 四日」……已牌、會蒲地久市宅、益多、先焉一溪、亨、研介……」（仝上）

「十二月 十日」研介歸郷……」（仝上）

「文政四年正月」三十六日……宿一溪、来告別、大歸也、贈以韋蘇州詩鈔一本、一溪本奥人也、入信濃僧、雲遊而来海西、自入吾門五年、而受教之日唯二年已、有才辯凡度、衲子中之傑然者、予於塾生命也、一溪、研介、焉三長者、幹理衆務、今失其一惜也、」（巻十六）

「二月 五日」會門生後来者觴之、凡十四人、研介……（研介郷里より再来の事尚る見えず、正月五日の条に「會門生觴之、凡三十有八人」云々とありて、その三十八人中の研介先生なし正月六日以後の帰塾せられしものと思はる）

「十七日、……研介、修二、二文山、隼人之天瀬、謙吉亦往、就温泉治濕也、……」（仝上）

「二十三日」顕二、研介、修二、歸塾」（仝上）

「三月 二日」聞嚴君疾不退、更招一医、使研介往視……予疾愈進、咳甚、胸鬱、服研介藥」（仝上）

「四月 二十一日」丹後人中西文潮、致書問研介消息與研介及坪井一助結焉兄弟者」……（仝上）

「五月晦日」……赴森成策招、益多、无爲、研介從焉、
……（仝上）
「六月二十六日」改月旦評、研介加五級下。……」（仝上）
「九月十三日」……夜嚴君來且以蕎麦見饋、迎
伯父、研介、賞月、三更而散……」（卷十七）
「十月十八日」研介之玖珠、……」（仝上）
「二十七日」……是日研介帰塾。……」（仝上）
「十一月二十一日」服研介治咳藥、……」（仝上）
「二十六日」……夜半妻俄病、請研介、清記診視……
（仝上）

「十二月四日」研介、養伯帰郷。」（仝上）
「文政五年」正月二十九日、研介帰塾。……」（卷十八）
「閏正月四日」研介之玖珠、……」（仝上）
「六日」……研介帰塾、……」（仝上）
「十三日」……使研介開孝經會讀」……（仝上）
「十四日」……研介去塾寓照蓮寺、……」（仝上）
「十六日」……研介帰塾……」（仝上）
「二月二十六日」……改月旦評研介加五級上、……」（仝上）
「三月十四日」……午後與研介、遊三松氏後亭、供酒

飯、順平、牛之助、文讓、研介陪座。……」（仝上）

「四月三十一日」……牧太愬爲五人所擯、筧、金八、右膳、連、普敎使謙吉、研介、專治、並衛治之。」

「六月八日」泄下益減、而發小便不利症、脫肛痛甚、夜招研介、以手術治之、苦不可言、失聲大呌、請而中止、忽憶昨夜心中作筮、過豫之解、介石貞吉之義、因決意就治、楚痛苦迫、生來未有、既納脫肛則得安穩、既而復泄、肛脫如故、再就治、苦痛比前較輕、留研介在家。」（仝上）

「九日」泄下益衰、痳及痔疾如昨、請研介加治數次、苦漸小減、……」（仝上）

「七月九日」……使研介講易於三松氏。……」（卷十九）

「二十六日」……改月旦評、研介加六級下。……是日兒玉茂、研介、一平輩、出入數回、議牧太事、牧太有罪禁未往、……」（仝上）

「八月二十九日」……研介將之日田、告別（仝上）

「九月十一日」……研介自日田帰……（仝上）

「十六日」……謙吉有宿疾、請研介行治、因養病於

我家、……（仝上）

「十八日」與一平、研介、之林成作家、議事、児玉茂立會。……」（仝上）

「十九日」……森成作来訪、因招児玉茂、研介、一平、議事、……」（仝上）

「二十日……招三松齊壽、叔父、森成作、澄川造酒右衛門、一平、研介、與齊壽詣官府、見大坪慎藏議事、帰放普教、見龍、首令、出塾。……」（仝上）

「二十二日」……（釈普教等黨を結びて塾を乱せる顛末を記し、その終りに「金八、連、託研介謝過帰塾」云々とあり、後普教の罪を赦すこと文政六年四月六日の条に見ゆ）

「二十四日」……研介將之筑前、来別。」（仝上）

「文政六年正月」二十七日……改月旦評……研介……除名……」（遠思樓日記巻一）

「七月十日……岡研介自筑前帰、来見……」（巻三）

「十二日」……招岡研介供飯、爲書其贈言。……」（仝上）

「十九日」……岡研介来別。……」（仝上）

「九月三日」……夜岡研介自周防至来見。……」（仝上）

「四日」……研介令姪司馬入門、與居熟……」（仝上）

「十三日」……夜與謙吉、研介……（以下十四人略）宴于樓上賞月、始隈後晴、至四更而散 酒後以青黄赤白黒爲題各賦一聯、予得白、曰、五柳門前人送酒、上林苑裏雁傳信、謙吉得黄、圮上傳書人是否、湖辺鑄鼎帝爲仙、研介得白 狂来俗悪既生眼、艸罷客嘲楊子去、他不具載……」

「十八日」……晩請嚴君、研介、謙吉、供酒飯 送筑前行也」（仝上）

「十九日」 謙吉與研介之福岡、學於亀井氏也。塾生皆送之路。……」（仝上）（謙吉氏はその年十二月二十三日ヨ

帰ヲ

二拾六歳ヨ當ル

「文政七年」八月四日……岡研介、熊抱右膳来訪、皆供午飯、右膳帰家、研介居三松氏。」（巻四）

「十一日」……岡研介来別、小酌。……」（仝上）

「文政十年」八月二十七日……岡研介自長崎至、宿。」（巻六）

「九月十三日」岡研介帰長崎。……」（仝上）

「文政十二年」二月三日……加藤俊民自長崎帰、来訪止宿、始審蘭人變事。（割書ヨシーボルドの事あり略す）先是人或傳、岡研介降獄、或云亡命、予久勞思、今始知其妄、研介去秋帰防、不再至崎云、」（欽齋日暦巻三）

四月四日……賀来佐一郎自長崎帰、過訪、致岡研介書、研介坐禁書之事、為宦所召而至崎、予初聞之、憂不能寤、至是知其事解、寢得帖席。……」（仝上）

「六日」……發與岡研介書……」（仝上）

「文政十三年」二月十六日　岡研介自長崎帰過訪、借飯」（巻五）

「十八日」……岡研介辞別、先是留下関、至是將之浪華、故来別……夜研介再来別、研介魚諸生、其名已播四方、実我黨之才一流也、今也遠別、再會無期、可勝嘆乎、所頼書信往復、天涯比鄰耳」（仝上）

「天保十一年四月」十三日……聞岡研介定死、去歳聞其死、今讀謙吉日記而信之、斯人天資正直、加大成之志、研究蘭学、名聞一世、亦發心疾而終、嗚呼惜哉……」（醒齋日録暦巻十九）

（去歳既聞其死」とあれど、天保十年の日記なほその事見当らず）

書中假名文りの註は　木林君所註

岡子寃墓誌

「嗚呼此岡子寃之墓耶、余欲作之銘、而無禁於我淚之先下也、子寃姓岡、名研、子寃其字、研方爲稱、周防平尾人、家世業醫、子寃幼而敏好學、志在大成、與友人坪井信道相謀、以荷蘭醫方、未弘本邦、欲興其說、師藝中井氏、肥吉雄氏、又親從蘭醫、窮究精微、於是欲有所著述、學文於予及筑亀井氏、既而講業浪華、聲譽日隆、不幸得疾、帰牀鄉里、蹇連多年、齎志而終、嗚呼坪井之名、今傾海内、而子寃乃託

一片石、以傳不朽耶、若使予究得志於年、則著述之
富、生徒之衆、將耀百世、又何待予文邪、顧予之文
果足使予究不朽耶、子究娶齋藤氏、生一女、壽四十
一、以天保己亥十一月三日卒、葬周防堅濱真覺寺、碑
面題法号、歿後五年、予因其兄平陵之請、作之銘、
銘曰、
祖劉著鞭、孰先孰後、彼蒼者天、獨奪之壽、扁
斯石兮、豈必不朽、欲知斯人、請視其友、」
（文稿拾遺―渓窓全集 上巻所收）

以上、二日間にて写し了る、而して更らに林君の之を書写せ
られたる筆を想ひ感謝禁ずる能はず、書して兒孫に
傳ふ、
此抄録を読み一代の碩学渓窓先生が研介を信任せら
れしかを知る事を得べし、また一面には當時の師弟の情
味の厚きを感ずるを得て殊に敬虔の念を禁ずる能は
ず、
文中、岡司馬、小川敬馬、の名は既に亡し、未だ精査の機
なし、後日を待つ、
司馬は、研介が先の子とあり、敬馬は研介が弟とあり、共に

考へ難し、研介の弟に玄泰と称するあり放蕩懶惰なりしと言はる、研介の兄、栗敬（最長、十七歳位にて死没、最も將来を嘱望せられし由なり）、次大祐（勝氣異常、藩公の勘めを受けて大島郡に蟄居閉門を命ぜらる、中年死去せしかと記臆す）三男泰安、家系を継ぎ、研介と相携へて、長崎吉雄塾及びシーボルトに就いて学びし事は、卒業証書ありて確実、嫡一子、泰紀ありしを聞くのみ、泰安平陵にちす、蓋し、平生の地名より取りしものなり、吾家中興の祖と謂ふ。

昭和六年九月二十二日　亡子研甫一週忌の日　記入

過去帳を調べるに當り、その裏面に記されたる畧系ありぬ

岡司馬、は大祐の長男にして、弐拾壱歳（文政十年十二月十二日）山口縣大島郡外入（トノミウ）にて死去「智明院通瑟達融居士」の戒名あり、

小川数馬、は泰紀の五男にして「小河内玄龍」の家を継ぎ、後小河内玄泰と稱せしものなり

右判明

昭和六年九月二十日、形ばかりの佛壇を購ひ岡家先祖代々之靈位を造りて祭る、此序を以て系圖及び過去帳を

近世日本國民史

（第三十四卷）

蘇峰生

孝明天皇初期世相篇

天保年間に於ける海外知識の取得（二）

（二八）

天保元年十一月、十日附にて、當時江戸深川に學舍を設け、之を日習堂と名け、醫業の餘、蘭學を教授したる坪井信道が、大阪なる岡研介へ與へたる書翰の一節に曰く、

江戸洋學家無數御坐候得共、多分山師俗子而已、一も取るに足不レ申、在職有力者の中にも、大に其說に心醉する者、往々御坐候得共、何分肝心の學者に出群之人無レ之、唯々一時の虛名と小利を貪る鼠輩のみにて、道欲レ行而不レ行、有志之士は不レ堪悲慨一候。此時正心誠意之學士興起せば、必千載之奇會を一洗して、實學を一定せん事疑なし。

とある。岡研介は周防の人、十四歲西遊して、筑前亀井の塾に入り、更らに長崎に赴き、シーボルトの鳴瀧學舍に學ぶ。シーボルト彼の才を愛し、高野長英と共に、其の孤兒となつた。シーボルトの獄起るや、此に連坐して入牢し、更らに日田に赴き、廣瀨淡窓に學び、成て而して恩あり、規條を設けて以て之を督す。辭說を善くして以て之を誘ふ、材を成す者甚だ多し。

と其の碑文にあるを以て知る可し。當時蘭醫、蘭學者等が、藩府以外、諸大名に抱へらるゝ者甚だ少くなかつた。天保二年には伊東玄朴は、肥前鍋島家の醫員となつた。青地林宗は、江戸在住の儒、水戸德川家に聘せられた。當時水戸齊昭の手書に

町醫師青地林宗者天文臺御用も相勤、蘭學者にては、日本一之由、御國許（常陸）へ時々異國船參候間、蘭學者入用可レ有レ之、此度抱度候。學者は擒藏（佐藤一齋）に限不レ申、蘭學者は右青地にかぎり申候。

とあれば、如何に攘夷論の本家本元に於いて、此の蘭學者が、優遇られたかを判知る。天保三年九月高野長英の居家備用成る。當時長英は江戸に在りて、門戸を張り、專ら翻譯を事とした。而して其の範圍は廣汎に渉り、單に醫術のみならず、博物、兵書、歷史、地理、其他苟しも民生を利し、人智を開らくもの、一として接觸せざるは無つた。而して彼によりて、泰西の知識を取得したる者、渡邊崋山の如きは勿論、諸大名中にも、亦た少くなかつた。

天保四年二月には青地林宗死した。三月水戸藩にては、幡崎鼎を聘し、鑄砲造船の譯述に從事せしめた。幡崎は長崎地役人にして、菊谷米藏と稱し、シーボルトの門人だ彼は其師の事件に連坐し、押込みの刑に處せられ、其の服罪中脫出して大阪に奔り姓名を變じ、江戸に來り、遂ひに水戸家に聘せられた。當時江戸に於ては、小關三英なども、密んに翻譯を事とした。彼も亦た長崎留學生の一人だ。而して小石元瑞の推薦にて、岸和田の岡部家に聘せられ、藩主に隨ふて江戸に來つた。

當時江戸には、蘭學者中、山手組

整理す、

下町組の二派あり、下町組は南地、杉田、宇田川、大槻、伊東、坪井の諸氏にして、山手組は高野長英、小關三英、鈴木春山、渡邊登、渡邊勝助、立原萬太郎、關鳴鳳、赤井鉉三、松村義安、松根内藏、内山愛太郎、部甲斐太郎、本木道平等であつた。此中には純粋の關學者でなく、單に外來の新知識を晴求する徒も少くなかつた。而して彼等は互ひに相ひ會して、外國の事情等に就き討論、研究した。此れが恐らくは渡邊登、高野長英等の獄の生ずるに至つた原因の一を成したものであらう。是亦た關學の爲めに、一厄難であつた。

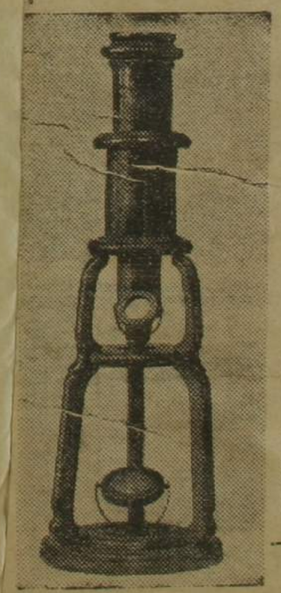
昭和九年一月三十一日 大阪朝日所載の西

天保時代の西洋顯微鏡發見

平生の岡氏邸にて

【山口】藤毛郡平生町岡德介氏の邸宅から今回極めて珍らしい西洋顯微鏡が發見された、右顯微鏡は天保時代オランダの名醫シイボルト氏が渡來し當時同氏の高弟であつた德介氏の祖先たる研介氏が譲り受け今なほ同家に秘藏されてゐたものである

この顯微鏡は高さ一尺あまりで上部のレンズの下方に白と朱色で油繪が畫かれてをり下方に反射レンズが付てあるもので今から百數十年以前の遺物との折紙をつけられ壓下において最古のものであるとのことである



（寫眞は發見された顯微鏡）

郷里、佐田俊雄叔父より飯倉に來りたるもの當方にては寸毫の記憶なし、明治以前に已に他、流出したるものと想ふか

印譜

泰安所用のもの也

石印、

「陶所」の文字側面にあり刻者の名ならむ、

泰紀所用のもの也

（珂山、岡紀）

上下兩面、石枕、

何用巖栖印姓名
一壺酒酌可忘形

何ぞ岩栖して姓名を印するを用ひんや、一壺の酒、酌んで形を忘るべし

子研

研介所用也

周紀印

子有氏

泰紀所用也

銅印

銅印

恭安所用か

材は石にあらず、木にあらず、漆かと思へども判明せず、甚だ軽し、夫婦印とでも云ふべき連鎖状をなせり

泰安、泰純、泰一、連用也

（平陵、我自然庄）

泰安、泰純、泰一、連用也

「廣淵堂」銅印

磨滅と銷び甚し

幼時家厳、日常事務用にしたりしを記憶す

開物成務

岡泰之印

泰安兼泰純所用か

岡印泰紀

岡研之印

研介所用也

石印　両面

岡子寛、岡研之印

研介、子寛の所用也

寛仲　岡雄之印

泰紀所用也

安

正雄　岡紀

正雄　岡紀

菱舟（釣客）知足

岡恭一所用

恭紀用

追記　昭和十年三月四日より

法眼恭純

延享二年の出生、

平生村に移住せーは　天明三年（月不詳）三十八歳

長男勇敎を伴ふ勇敎時に九歳となせり、（研りの古帳ふ依る）然りとすれば勇敎安永四年生れとなる

勇敎の母は廣嶋縣當時藝州小田村教円寺娘とあり平生村東住の前年天明二年八月十七日死去とあるの外、

恭純は文化四年十二月十八日死去　六十二歳となる、

勇敎は　二十歳にて死去、寛政六年十二月十二日

明和四年生れとなる、　享和永七年即ち安政元年四月廿四日没　八十八歳、賢良の問え高し、大島郡小松村

恭純後室、

田中氏吉工門の娘（名を忘れたり）但し畫像残存、円満無碍の相あり、学人、大祐、泰安、研介、玄茶、の四男を生む
泰安の兄勝義あり早世、その姉に「タメ」と云へるあり、坂氏に嫁ヒテ
ヒトが三十七歳にて死去 玄茶の妹に「里」と云へるあり 岩國町
水谷松茂と云へる人に嫁し子あり、
となる、岩国の人也

計五男二女ありし事

研介遺墨（家宝花の幅）

一片驚潮鳴捲雪、千重遠嶼聳拖藍
風收赤馬江関外、帆落彌陀山寺南
客子萍蹤存壯志　先生木屑富雄談
此情他日莫相忘　好向西肥扣草庵

赤間関邂逅　今道鶏山席上走筆　岡研拝具

此軸沼津ニテ焼失

昭和十年七月三日
弘津史文君
所贈

シーボルトより
研介に譲與したる
當時の顯微鏡也

弘津氏は元郷里平生町新市の富家にて我家祖と親交ありし家なり史文君の父君吉太郎と云ふ恐らく我祖父没後に當家に濡られしものか、

昭和十五年三月初旬 大阪朝日所載 東覺寺 弘中寅吉氏送

卓拔した蘭醫學者

發狂するほど勉強した岡研介

隱れたる長崎人物誌

岡研介は長崎へやつて來てわが國に蘭醫學を傳へ新しい文化開發に偉功をのこした獨人シーボルトの高弟で、かの高野長英とならび稱せられる逸材であつた寛政十一年いまの熊毛郡平生町に生れ父が醫者だつた關係で彼も少年時代から醫學と漢學を學び、また十六歳のころには中井厚澤について、のちに天下に有名となつた西洋醫坪井信道らとともに蘭學をも學んだのである二十歳を過ぎて九州の儒學淡窓亀井昭陽などといふ秀れた學者に漢學を學んでゐたころシーボルトが長崎へ來て鳴瀧の塾を開いたので彼もその塾に入つた、こゝには高野長英をはじめ天下の秀才が集まつて頻つて新文化の吸收につとめたがこれら門人のなかで蘭語を讀むことは高野長英が一番、蘭語を話したり書いたりすることは研介の右に出るものがなかつたといはれるほどで、遂に彼はこゝの塾頭に擧げられシーボルトの通譯を仰せつかつたものだ

彼の物强ぶりは治んど常軌をはづれたくらゐで晝も夜も書物を手から離さず、疲れると机に倚りかゝつたまゝ寢るといつた調子で布團など敷いて熟睡することはなかつたといはれてゐる

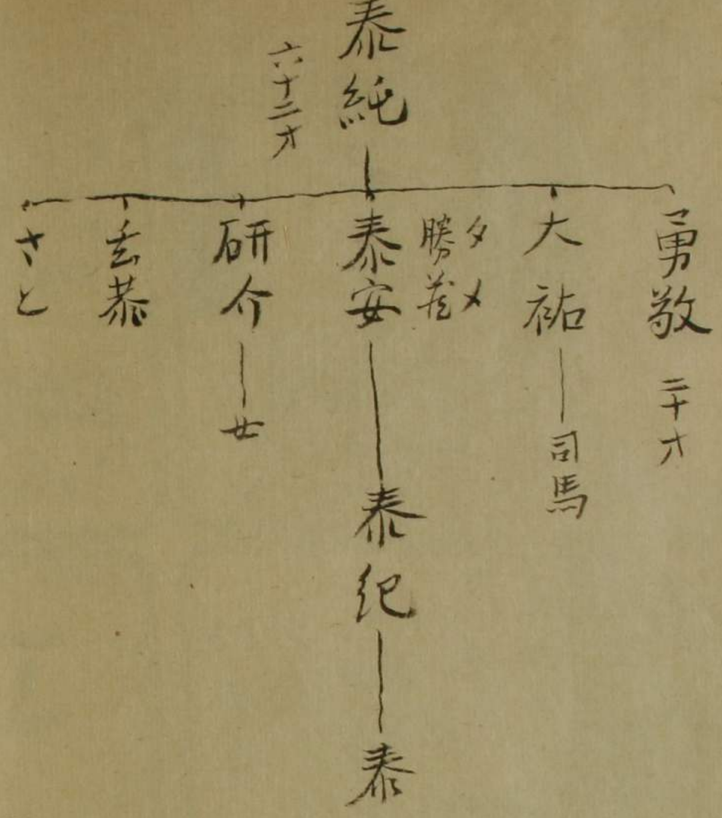
かうした過度の勉强やその後起つたシーボルト事件の心配などからか彼はのち大阪に開業して發狂してしまつた、當時親友の坪井信道はすでに江戸で押しも押されもせぬ西洋醫の大家となつてゐたが、研介の學問には敬服し

いまの西洋學は尊兄のほかに人はゐない、これは決してお世辭でも何でもなく天下の公論だ

と手紙を送つてゐるほど秀れた醫學者になつてゐた、養生のため郷里に歸り、その間にも岩國藩主や人々のために病氣診療を行ひ、また近隣の少年達に漢學を教へたりしてゐたが、學問のことになると頗る實に研えかへりいたつて正確で、むづかしい四書なども書物も見ずに教へたといふことである、天保十年遂に四十一歳で病死したが彼がもつと永く健在で自己の學問を十分に活用することが出來、そして年來の希望通り江戸へでも出て一度は最初江戸へ行くつもりでゐたのを中止して大阪で開業した一活躍してゐたら大きな業績を殘してゐたことであらう實に惜むべきである、舊師醫淡窓ものち彼の碑文を書いたなかで

坪井信道の名はいま日本中に知れわたつてゐるのに研介は一片の石となつてしまつた、もし研介が永生きしてゐたら多くの著述もし大勢の弟子も出來て百代までも名を歸やかしたであらうに、惜しいことをした

と嘆息してゐるのである＝寫眞は岡研介の遺墨



泰純後室ツル	八十八歳
泰安	六十四歳
泰紀	三十〇歳
泰一	六十歳
泰弟室	七十二歳
泰純室イチ	八十歳
泰一室チヨ	五十三歳

男系

○藏幅

沼津ニ在りし二男毅再宅ヘ疎開
昭和二十年七月十日沼津空襲に遇ひ
全部焼失す、此外祖先より伝来の什
器も亦罹災

一、岡泰純恵像　一幅
一、〃室　〃　一幅
一、岡泰安恵像　一幅
一、研介　書　三幅

一、泰紀　阿山　書　三枚
一、神農像　一幅
一、楊岑筆　神詭昇天　一幅
一、五岳上人　書　梅花之詩　一幅
一、淡窓　書　一幅
一、〃　送子究東内、福　一幅
一、〃　賀詞　泰純宗八十三賀　一幅

一 亀井昱陽 書 一幅

一 塩谷老田 書 孝経全文 大幅 一幅

岩國之人、春海春紀と甫洲斷金の交あり詩人

一〃 留別七言律 一幅

一〃 讀摂西六家詩 七言古詩 一幅

以上 拾九幅

此外四種災焚の書画 彩らーきしの数本あり祖先と関係あれば畧之

此外災と免れし自宅に残存せる掛額に亀井昱陽の医師職扶解の序文あれ共 風化行損せり、また老田の幅「詠平陵」七言絶句一幅、宮永有隣去 七言絶句 老名の去二三弥存すれ共 春海研合に関係薄し 少島地默雷等 ければ畧之

以下

10丁

白紙